

小学校移行期における行動・情動制御と仲間関係

中澤 潤

Behavior, Emotional Regulation and Peer Relation during Transition from Kindergarten to Elementary School

NAKAZAWA Jun

子どもが環境移行を体験し、それに伴い仲間関係の再編成を求められる小学校入学前後の適応を規定する要因を検討した。年長幼児(N=52)を対象に、年長時点とその後の1年生時点の双方で仲間関係と行動評価を測定した。幼児期の社会的行動は小1時の仲間関係を予測しなかった。一方で、幼児期の仲間関係は小1時の社会的行動を予測し、幼児期の仲間からの友人選択の少なかったものは、幼児期の友人選択の影響を統計的に取り除いても、小1時に攻撃的、引っ込み思案と教師から評価された。幼児期の仲間関係の豊かさが、後の適応の重要な要因であることが明らかとなった。また一部の幼児(n=21)で検討された幼児期の情動制御における体表温の低さは小1時の過活動と関連する傾向が見られた。

キーワード：幼小移行期、行動、情動制御、適応、仲間関係、縦断研究

目 的

子どもの仲間関係をめぐる適応は、特に環境移行期に出現しやすい。本研究では子どもが環境移行を体験しそれに伴い仲間関係の再編成を求められる小学校入学の前後を縦断的に検討することにより、幼稚園から小学校低学年にかけての適応を規定する要因の解明を行なう。

思いやりや援助などの向社会的行動、攻撃や意地悪などの反社会行動、引っ込み思案などの非社会的行動といった多様な社会的行動が、子どもの仲間関係に影響していることは多くの研究が指摘している(Asher & Coie, 1990; Ladd, Price & Hart, 1990; Nakazawa, 1988; 中澤, 1992)。これら子どもの社会的行動が何に由来しているかについて、従来は生得的な性格、社会的学習などから論じられてきたが、認知心理学の発展に伴い社会的場面における問題解決の結果として現れた行動と見る見方が提出されるようになった(D'Zurilla, 1986; D'Zurilla & Goldfried, 1971; Shure & Spivack, 1972; 中澤, 1996)。Dodge (1986)はこの社会的問題解決に働く情報処理を「社会的情報処理」と名づけ、その過程を1. 符号化、

2. 表象、3. 反応探索、4. 反応決定、5. 実行という社会的情報処理過程のいずれかのステップにおける歪みが仲間関係において不適切な行動をもたらし、結果的に適応上の問題を生じさせることを明らかにしてきた。その後このモデルは、Crick & Dodge (1994)により目標の明確化というステップを加えた6段階過程モデルへ、さらに情動過程や情動制御を組み入れたモデルの提案へと(Lemerise & Arsenio, 2000; 中澤, 1996)発展し、多くの関心と研究が蓄積されている。

本研究は、これらの社会的行動の認知・情緒制御研究を踏まえ、子どもの適応上の問題の生じやすい環境移行の一つとして幼稚園から小学校への移行期に焦点を当て、子どもの社会的行動や仲間関係における適応や問題行動の発生過程を明らかにしようとする。このような実証的な発達病理学研究(Wenar & Kerig, 2000)は、どのような子どもが、どのような環境のもとにおかれると、どのような発達過程をたどっていくのかという、発達研究の中心的問題に答えるものとなる。また同時に、適応上の問題発生
の解明がなされることでその予防への糸口を得るこ

とができる。

研究 1

仲間関係の研究では、特に友人数と社会的行動との関連が検討されてきた。向社会的行動は友人数の多さと、一方非社会的行動や反社会的行動は友人数の乏しさと関連するとされるが (Asher & Coie, 1990; 中澤, 1996)、これらは同時相関研究に基づく結果である。行動と仲間関係の関係をより厳密に明らかにするためには、縦断的測定が必要となる。Miller-Johnson et al. (2002) は、小学1年時での攻撃性よりも仲間からの拒否が小学4年時の反社会的行動を予測することを示している。またCowan & Cowan(2004)も1年時の仲間からの拒否が小学4年時の反社会的行動を予測することを示した。

本研究は、年長幼児時と1年生時の双方で仲間関係と行動評価を測定し社会的行動が後の仲間関係形成に影響するのか、仲間関係が後の社会的行動に影響するのかを検討する。

方 法

調査協力児

C大学附属幼稚園年長児58名。同大学附属小学校1年生時で縦断的調査を行った。他校進学、転校などで6名が抜け、最終的には52名(男児28名、女児24名)であった。

材料

仲間関係 一緒に遊ぶ友達をたずねた。

行動評定 Ladd & Proffitt (1996) の *Child Behavior Scale* (CBS) 日本版 (向社会、攻撃、過活動、不安、非社会、被排斥: 中澤・中道, 2007)。

手続き

仲間関係 年長時には6月に個別面接で、小1時には2月に質問紙で尋ねた。級友からの被選択数を指標とした。

行動評定 幼稚園ないしは小学校の担任教師に評定を依頼した。評定は、よくあてはまる3、ときどきあてはまる2、あてはまらない1の3段階である。年長時には10月に全35項目を、小学1年時には2月に各側面3項目ずつの18項目を用いた。CBSの分

析には、双方に共通する18項目を基に行った。

なお本研究にあたり、C大学生命倫理委員会の審査・承認を得た。

結 果

測度間の相関

被選択数 年長時と小1時の被選択数間の相関は $r = .282$ で、有意ではなかった。移行期を通して新たな人間関係が生まれていることが示唆される。なお、附属幼稚園から進学した者とそうでない者で被選択数に差はなく(進学者: 平均2.65、他園からの入学者: 平均2.85)、ここからも2月時点では既に新たな人間関係が生まれていることが示唆される。
幼児期の社会的行動と小1の仲間関係 小1時の被選択数と年長時のCBSの相関には有意なものは見られなかった(表1)。さらに小学1年時の被選択数と年長時のCBSとの偏相関(幼児期の被選択数を制御変数とする)を求めたが、有意な偏相関はみられなかった(表1)。このことから、幼児期の各社会的行動は1年生時の仲間関係を予測しないといえる。

幼児期の仲間関係と小1の社会的行動 年長時の被選択数と小1時のCBSの相関をみると、攻撃 ($r = -.442$)、不安で ($r = -.406$) で有意ないし有意傾向であった(表1)。さらに年長時の被選択数と小1時のCBSとの偏相関(小1時の被選択数を制御変数とする)を求めたところ、同様に攻撃 ($r = -.571$)、不安 ($r = -.401$) で有意ないし有意傾向であった。年長時に仲間関係が多い子は、小1時に攻撃、不安が低い、仲間関係が少ない子は小1時に攻撃、不安が高い。

重回帰分析

年長時の社会的行動による小1時の仲間関係の予測

小1時の被選択を従属変数、年長時の被選択、CBS各得点を独立変数とする重回帰分析は有意な R^2 を得られなかった。

年長時の仲間関係による小1時の社会的行動の予測

小1時のCBS得点を従属変数、年長時の被選択、CBS各得点を独立変数とする重回帰分析によると、小1の攻撃で有意な $R^2 = .422$ が見られ ($p < .001$)、年長時の攻撃 ($\beta = .470$, $p < .001$)、年長時の非社会

表1 測度間の相関 (研究1)

年長時	年長時		小1時					
	友人被選択数	友人被選択数	CBS向社会	CBS攻撃	CBS過活動	CBS不安	CBS非社会	CBS被排斥
友人被選択数		.282	-.158	-.442*	-.210	-.406+	-.195	-.051
CBS向社会	.133	.069	.436**	-.241+	-.225	-.137	-.320*	-.286+
CBS攻撃	-.319	.215	-.130	.639**	.038	.164	.225	.133
CBS過活動	-.255	-.055	-.127+	.232+	.293*	.276*	.064	.036
CBS不安	-.256	-.191	.002	-.155	.067	.299*	.075	.208
CBS非社会	-.257	-.223	-.013	-.156	.196	.067	.245+	.032
CBS被排斥	-.258	-.006	.056	.389**	.118	.098	.419**	.161

($\beta = -.319$, $p < .05$)、年長時の被排斥 ($\beta = .303$, $p < .05$) が有意であった。年長時に攻撃的な者、仲間から排斥される者は小1で攻撃的と見られ、引っ込み思案な者は小1で攻撃的と見られることは低い。

また小1の非社会で有意な $R^2 = .164$ が見られ ($p < .05$)、年長時の向社会 ($\beta = -.285$, $p < .05$)、年長時の被排斥 ($\beta = .400$, $p < .05$) が有意であった。年長時に、仲間から排斥される者は小1で引っ込み思案と見られ、向社会的な者は小1で引っ込み思案と見られることは低い。その他の行動では有意な R^2 は見られなかった。

考 察

年長時の社会的行動は小1時の友人数と関連しなかったが、年長時の友人数は小1時の社会的行動に関連した。このことは、行動が仲間関係に影響するよりも、仲間関係が行動に影響するという Miller-Johnson ら (2002) や Cowan & Cowan (2004) の結果と一致するものである。仲間関係が乏しいことは、社会的に適切なスキルの学習の場を持ってないということであり、対人関係改善の機会を失うことになる。また仲間関係の乏しさは、孤独感や孤立感、さらには仲間からの拒否感、敵対感を感じさせることになり、自尊心を損なうことにもなる。これらの蓄積が後の不適切な社会的行動の評価 (攻撃性や不安の高さ) をもたらすのであろう。特に、幼稚園から小学校への移行というこの時期、新しい友人関係作りには、幼児期の友人関係から得た対人関係を持つことへの自信や対人積極性、他者の受容などが重要となる。本研究の結果は、こうした移行期におけ

る仲間関係の重要性と、幼児期に豊かな仲間関係を得ることの意義を示すものと言えよう。

一方、重回帰分析の結果は年長時期に攻撃的な者は小1時にも攻撃的であることを示している。年長時期に引っ込み思案な者は小1時に攻撃的であることは低い。年長時に向社会的であることは、小1時に引っ込み思案であることは低い。興味深いのは、年長時の仲間からの排斥である。年長時に仲間から排斥されると評価された者は1年時に攻撃と非社会の双方で有意であった。仲間から回避されることが、仲間の敵意によると外的に認知された場合、攻撃的な行動をもたらす、自己の力量の乏しさによると内的に認知された場合、非社会的な行動を生むのかもしれない。

研究2

中澤 (2009) は、情動制御は幼児の適応に大きな影響を持つことを明らかにした。すなわち、情動喚起刺激視聴時の生理反応と仲間関係の関連を検討したところ、仲間から遊び友だちとして選ばれることが少ない子は、多い子に比べて、情動刺激場面並びに情動喚起後の安静場面において鼻頭で測定した体表温の低下が大きかった。特に、情動喚起場面だけでなく、情動喚起後の安静場面でも体表温の低下が大きかったことは、情動場面で喚起された不安や緊張の解消が難しいことを示し、ある場面で喚起された感情を別の場面に持ち越す可能性が高いことを意味する。感情の制御や調整が不十分であることで、別の場面でさらにトラブルを引き出しやすかったり、ネガティブな感情を抱えることでいつまでもな

表2 測度間の相関 (研究2)

(N : Negative)

年長時	年長時		小1時					
	友人被選択数	友人被選択数	CBS向社会	CBS攻撃	CBS過活動	CBS不安	CBS非社会	CBS被排斥
N場面体表温	-.046	-.228	-.283	.318	-.054	.334	.017	-.030
N後安静体表温	.632**	.328	.015	-.311	-.375+	-.224	-.293	-.307

かなか仲間に入れなかったりし、そのために仲間関係が乏しいものになることが示唆される。このような幼児期の情動制御はその後の1年時の適応や仲間関係にどのように影響するのだろうか。

研究2では、年長幼児時の情動制御の指標と1年生時の仲間関係と行動評価との関連を検討する。

方法

調査協力児

研究1の幼稚園年長児52名のうち、情動制御の指標を得た21名(男児12名、女児9名)。小学校1年生時に仲間関係と行動評価調査を再度行った。

材料

情動制御 刺激としてMISC (*Mood Induction Stimulus for Children*: Cole, Jordan, & Zahn-Waxler, 1990) を基に作成した情動喚起DVD。情動制御の指標としての体表温測定のために赤外線サーモグラフ (Avio ; TVS-200EX)。

仲間関係 一緒に遊ぶ友達をたずねた。

行動評価 Child Behavior Scale (CBS) 日本版。

手続き

情動制御 年長幼児期10月にMISC視聴時の鼻頭体表温をサーモグラフで測定した。MISCでは情動喚起として4つの感情(喜び、悲しみ、怒り、不安)のエピソードが2つずつ提示され、各エピソード後に安静期が設けられている。ネガティブ感情喚起エピソード、及びネガティブ感情喚起直後の安静場面における体表温を指標とした。

仲間関係 小学1年時に2月に質問紙で尋ねた。級友からの被選択数を指標とした。

行動評価 小学1年時に2月に担任教師各側面3項目ずつの18項目を評定した。

結果

測度間の相関

年長時内の相関 表2に示すように、ネガティブ感情喚起直後の体表温(N後安静時体表温)と被選択数との間に $r = .632$ の有意な相関が見られた。ネガティブ感情喚起後に体表温の高い者は友人として選ばれること、逆に体表温が低い者は、友だちとして選ばれることが少ないことを示している。

年長時と小1時の相関 情動制御測度と小1時の友人関係及び社会的行動測度との相関を表2に示す。N後安静時体表温は小1時のCBS過活動との間に $r = -.375$ と有意傾向の相関を示した。小1の他の測度との間は有意ではない。ただし、N後安静時体表温の相関の方向を見ると、被選択数やCBS向社会とは正の、CBSの他の測度とは負の相関が見られ、ネガティブ感情喚起後の体表温の回復が情動制御の指標となり、それが後の行動にも影響する可能性を示唆している。

考察

ネガティブ感情喚起後安静時の体表温が、友人関係や後の過活動という教師評定と関連していた。すなわち、ネガティブ感情を喚起された直後の安静時で体温の低下が大きいほど、仲間関係が乏しく、後に過活動傾向にあると教師から評価されることを示す。ネガティブ感情喚起後安静時体温の低さは感情の回復の遅さを示唆し、感情制御の指標となることを示している。ネガティブな感情からの回復が遅く、その感情を引きずりやすい者は、そのような感情を抱えることでなかなか仲間に入れなかったり、抱えていたネガティブな感情を異なる場面で表出してしまうことで仲間から敬遠されたりし、その結果として仲間関係が乏しいものになることが示唆される。有意ではないが、相関の方向はこのような推測を強めるものであろう。本研究は情動制御、特に感

情の回復の指標として、ネガティブ感情後の体表温の測定の有効性を示唆するものである。

総合考察

幼稚園年長時期の仲間関係と情動制御が小学1年生時の社会的行動への教師評価と関連していた。幼児期の仲間関係と幼児期のネガティブ後安静時の情動制御の関連を踏まえると、幼児の持つ生物学的な情動制御（ネガティブ情動からの回復）の難しさが仲間関係を阻害し、その結果としての幼児期の仲間関係の乏しさが小1時の教師評価につながるのかもしれない。これらの因果連鎖の解明や、介入による因果連鎖からの解放の可能性の検討が課題となろう。

文献

- Asher, S.R., & Coie, J.D. (1990). *Peer rejection in childhood*. New York: Cambridge University Press. 山崎 晃・中澤 潤 (監訳) (1996). 子どもと仲間の心理学：友達を拒否するところ 北大路書房
- Cole, P.M., Jordan, P.R., & Zahn-Waxler, C. (1990). *Mood induction stimulus for children*. Bethesda, MD: National Institute of Mental Health.
- Cowan, P.A., & Cowan, C.P. (2004). From family relationships to peer rejection to antisocial behavior in middle childhood. In J.B. Kupersmidt & K.A. Dodge (Eds.) *Children's peer relations: From development to intervention* (pp.159-177). Washington, DC: American Psychological Association.
- Crick, N.R., & Dodge, K.A. (1994). A review and reformulation of social-information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, 115, 74-101.
- Dodge, K.A. (1986). A social information processing model of social competence in children. In M. Perlmutter (Ed.), *The Minnesota symposia on child psychology, Vol18*. (pp.77-125) Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- D'Zurilla, T.J. (1986). *Problem-solving therapy: A social competence approach to clinical intervention*. New York: Springer.
- D'Zurilla, T.J., & Goldfried, M.R. (1971). Problem solving

- and behavior modification. *Journal of Abnormal Psychology*, 78, 107-126.
- Ladd, G.W., Price, J.M., & Hart, C.H. (1990). Preschooler's behavioral orientations and patterns of peer contact: Predictive of peer status? In S.R. Asher, & J.D. Coie (1990). *Peer rejection in childhood*. (pp.90-115) New York: Cambridge University Press. (中澤小百合 (訳) (1996) 幼児の行動特性と仲間との接触パターン：仲間内地位を予測するか？ 山崎 晃・中澤 潤 (監訳) (1996). 子どもと仲間の心理学：友達を拒否するところ (pp.96-119) 北大路書房)
- Ladd, G.W., & Profilet, S.M. (1996). The child behavior scale: A teacher-report measure of young children's aggressive, withdrawn, and prosocial behaviors. *Developmental Psychology*, 32, 1008-1024.
- Lemerise, E.A., & Arsenio, W.F. (2000). An integrated model of emotion process and cognition in social information processing. *Child Development*, 71, 107-118.
- Miller-Johnson, S., Coie, J.D., Maumary-Gremaud, A., Bierman, K., & the Conduct Problems Prevention Research Group (2002). Peer rejection and aggression and early starter models of conduct disorder. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 30, 217-230.
- Nakazawa, J. (1988). Social information processing and social skill of young children. *XXIV International Congress of Psychology, Abstract*, F26.
- 中澤 潤 (1992). 社会的問題解決における情報処理過程と子どもの適応 千葉大学教育学部研究紀要, 40, 263-290.
- 中澤 潤 (1996). 社会的行動における認知的制御の発達 多賀出版
- 中澤 潤 (2009). 幼児における情動の制御と仲間関係 日本発達心理学会第20回大会発表論文集, 176
- 中澤 潤・中道圭人 (2007). 子どもの行動尺度 (CBS) 日本版の作成 千葉大学教育学部研究紀要, 55, 97-105.
- Shure, M.B., & Spivack, C. (1972). Means-end thinking, adjustment, and social class among elementary-school-aged children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 38, 348-353.
- Wenar, C., & Kerig, P. (2000). *Developmental psychopathology: From infancy through adolescence*. Boston, MA: McGraw Hill.
- (本研究は科学研究費補助金 基盤研究 (C)「幼稚園一小学校移行期における仲間適応要因の発達精神病理学的検討」 課題番号19530555 (研究代表者：中澤 潤)による)

